父の剣

「なんつーか、おまえの剣には邪気があんだよなあ」
切り株に座って剣の稽古を見てくれていた義父の言葉に、少年はぎくりとした。義父の仇を取るという剣を学ぶ目的が、バレてしまったかもしれない。
「ねがいがかなうなら、オレはあくまになってもいい」
「おまえうまいこと言うな！　悪魔は元々天使だからな」
　ロカにとって天使といえば愛娘だ。だが親友から預かったこの子もかなりいいセンいっている。間違いなく天使の一人だ。けれどその二番目の天使は剣の柄をぎゅっと握りしめて警戒するようにこっちを見ている。ロカはハハッと笑った。
「心配するな、ヒュンケル。オレはおまえから剣を取り上げたりしねえよ。剣を握る人間はみんな何かしら背負ってるもんだ。そんな人間から剣を取り上げたところで、別のものを探すだけだ。それより手を見せてみろ」
　ほっとしたヒュンケルは少しだけためらったものの、すぐに剣を納めて走り寄り、両手を差し出した。ロカはその手を開かせて、天に向ける。剣の柄と変わらぬ細さの腕の先の、これから何でも掴めそうな手。まだ子どもの柔らかい手にできた血豆を何度も潰し、徐々に皮膚が硬質化していった手は、いっぱしの剣士のものだ。努力している。そしてロカが見た全ての騎士を凌駕する剣士としてのセンス。だが、心がまだ若すぎる。

「いいか、ヒュンケル。剣というのは心だ」
途端にヒュンケルは戸惑う顔を見せ、それから自分の手のひらを見つめた。ロカはそんな弟子に言葉を重ねる。
「ただ振るだけならいい。だが生命に対して剣を振るったとき、それはおまえの業となり、剣も心も重くする。それはいつかおまえの心を押し潰すくらいにな」
「……」
「だからヒュンケル、技や力より、心を強くしろ」
ロカはヒュンケルを見つめた。とても聡い子だ。いまよくわからない顔をしているのは、実感がないからだ。だがいつかこの子は必ず理解する。そのときに決して後悔してほしくないのだ。
「ロカは……」
やがてヒュンケルは手のひらを見つけていた顔を上げ、師を見つめた。
「うん？」
「ロカの剣も重いの？」
弟子がそう言ったのは、師の剣が物理的に重くなったと思っていたからだ。自分に剣を教え始めた頃、師は常にそばで大木がそびえるように立っていた。自分より大きな剣を一振りすれば風を斬り、ぴゅんと音が鳴った。だが今は稽古中は座っているし、まっすぐに振り下ろされる剣からは風を斬る音はもう聞こえない。子どもは知らなかったの

だ。自分がそれまでの世界を失ったあの日、師もまた未来の多くを失ってしまったことを。

心配そうな瞳で自分を見る義息子に、ロカはにぃっと口端を上げて見せた。子どもの無垢な目は、時々知られたくないことを見つけてしまう。自分の生命に期限があることは知られたくない。

「重い！　とんでもなく重い！　でも重いからこそ、オレは自分の守りたいものが守れたんだ。後悔なんてねえよ」

豪快に笑う義父の顔に、少し悲しみが混じっていることはヒュンケルにもわかった。義父ほどでなくても、子どもは仇の親友であるこの義父が大好きだった。いつも笑顔を向けてくれていたからこそ、それが本物の笑いじゃないことがわかった。でもそれ以上何も言えない。ヒュンケルがその顔を少し曇らせたとき、ぽんぽんと頭を叩かれた。

「なあ、ヒュンケル。さっきおまえの剣には邪気があるって言っちまったが、おまえは絶対大丈夫だ！」

ヒュンケルはもう一度義父を見た。その顔にはもう笑みはなく、まっすぐに自分を見ていた。

「言ったろ？　剣は心だって。おまえが見ていた親父さんの心が、おまえの剣の土台になんだよ。その心がおまえを守る」

「とうさんの心が？」

ヒュンケルは目を輝かせた。よくわからないけど、とうさんが今でも近くにいるのだろうか。

「ああ。親父さんの心がおまえを守る」

ロカはまた同じことを繰り返した。今度は絞り出すように。

子供達の生きる世界を守ることはできた。だからあの戦いに後悔はない。だがこれから先、その世界で生きる子供たちには、必ず試練が訪れる。その時に自分はもういない。何もしてやれない。それは身を斬られるどころの痛みじゃない。その思いは、アバンにこの子を託した魔族の父親も自分もなにひとつを変わらない。

ロカは目の前のヒュンケルを見つめた。見つめ返す瞳の、あまりにも素直で、やわらかい心。人間と敵対した魔王軍の中で育まれたこの美しい心は、いつか人間の中で挫けてしまいやしないだろうか。

「おまえが出会う天使が、おまえを救ってくれるように」

それは子供達が生きる世界のために生命を引き換えにした父親達の、どうしようもない祈りの言葉だった。